

# 松盆栽の輸出拡大に向けた生産体制の強化

■ 香川県盆栽生産振興協議会、高松盆栽輸出振興会 ■

(東讃農業改良普及センター 中屋敷彩)

## ●対象の概要

高松市の鬼無・国分寺地区では、約200年前から盆栽の生産が始まり、現在は日本一の松盆栽の産地となっている。県内の盆栽生産の大半がこの2地区に集中しており、両地区の生産者数は約180戸、生産面積は11haである。

香川県盆栽生産振興協議会（以下、盆栽協議会という）は、県内の盆栽の生産振興を図るため昭和57年に設立され、県、高松市、JA香川県、鬼無・国分寺地区の生産者で構成されている。

また、近年、海外でも盆栽の人気の高まり、輸出拡大が期待される中で、盆栽の輸出拡大とブランド化の推進のために高松盆栽輸出振興会が平成25年に設立され、EU加盟国向け盆栽の輸出の促進に取り組んでいる。

令和2年には、高松市国分寺町に盆栽の情報発信の拠点となる「高松盆栽の郷」が整備され、高松盆栽の郷推進協議会を中心に、盆栽の販売や高松盆栽の郷フェスタなどのイベントが実施され、益々盆栽産地の活性化が期待されている。



高松盆栽の郷

## ●課題を取り上げた理由

EU加盟国に向けた盆栽の輸出については、これまで、マツ属では、五葉松しか認められていなかったが、令和2年10月に黒松の輸出が解禁された。これにより、輸出相手国の検疫条件に合わせた2年間の栽培管理期間を経て、令和5年1月から、黒松の輸出が本格的に開始された。

一方、産地では高齢化や後継者不足により盆栽の生産量が年々減少しており、特に輸出向けで人気が高い小型から中型の商品が不足していることから、生産量の増加が急務である。

また、盆栽の生産技術は、主に世襲制で継承されてきたが、生産者の高齢化や世代交代が進む中で、熟練生産者が培ってきた高度な技術が途絶えてしまう懸念がある。このため、産地では、令和元年から接ぎ木や真柏の彫刻などの勉強会を行うなど、技術継承を進めており、こうした活動を継続していくため、定期的な取り組みに発展させることが必要と考えられた。

さらに、輸出拡大に向けて、主な輸出先である台湾では、根洗いとセンチウの除去処理が必要となうえ、輸出先における鉢上げ後の葉の黄化や枯死による商品ロスへの対応が、また、EU加盟国向けでは、輸出時の検査においてセンチウの完全除去のための技術の改善が求められている。

そこで、栽培技術の継承と生産量の増加に向けた挿し木技術の検討を行うとともに、輸出検疫の条件に対応した技術開発を行うため、以下の活動に取り組んだ。

## ●普及活動の経過

### 1 巡回指導および勉強会の実施

個々の生産者の栽培・経営の状況を把握するため、盆栽協議会の役員および30代から50代の若手生産者を中心に、個別に巡回指導を行った。また、熟練生産者の技術を若手生産者に継承する取組みの一環として、盆栽協議会会長と連携し、針金掛けの技術に優れた熟練生産者に、若手生産者へ教えてもらえるよう働きかけ、勉強会を開催した。

さらに、令和3年度までの活動で作成した写真・動画をまとめた接ぎ木マニュアルを有効に活用して技術継承を促進するため、冊子を盆栽協議会に所属する生産者に、動画をまとめたDVDを若手生産者等に配布し、接ぎ木による苗木生産に役立ててもらった。

## 2 苗木生産技術「挿し木」の検討

盆栽の苗木生産方法として、実生や接ぎ木、挿し木、取り木などの方法があるが、挿し木については、技術が確立されておらず、発根率が低い等の理由から取り組んでいる生産者が少ない。そこで、黒松の優良系統「瑞宝」において採穂用母樹の芽切りの有無および挿し木時期（春・秋）、採穂部の違い（上部・下部）による発根率を調査し、技術確立に向けて検討を行った。

## 3 検疫条件に対応した防除技術の検討

令和2年度に設立されたコンソーシアムの一員として、「イノベーション創出強化研究推進事業」を活用し、関係機関と連携して、根洗いに伴う盆栽の品質低下の抑制やセンチュウ除去技術の開発に向けた対策に取り組んだ。

まず、輸出に取り組んでいる生産者に、輸出までのスケジュールや使用している資材などの聞き取り調査を実施し、現状把握を行った上で試験を設定し、令和4年度は発根状況や品質低下の観察および調査を行った。

## ●普及活動の成果

### 1 熟練生産者による勉強会の実施

針金掛け技術に優れた熟練生産者を講師に、令和5年2月に勉強会を実施した。勉強会に向け、熟練生産者の協力のもと、針金掛けの方法や年間の管理など、盆栽作りで重要なポイントをまとめた資料を作成した。

勉強会では、若手生産者を中心に11名が参加し、熟練生産者の講義や、見本を用いた針金掛け方法の実演を行った。



針金かけを学ぶ若手生産者

また、生産者が各自持参した盆栽を用いて、

熟練生産者のアドバイスを受けながら針金掛けの実習を行うことで、熟練技術を習得できる機会となった。この勉強会により、熟練生産者の技術に触れ、また生産者間の交流にも繋がった。

### 2 芽切りの有無による発根率の向上

令和3年10月に挿し木をした試験区のうち、発根率は芽切り無し区で28.8%、芽切り有り区で7.5%と、芽切り無し区の方が高い発根率となっており、挿し木技術の確立に向けたデータを収集することができた。

春に挿し木を行った芽切りの有無および採穂部の違いによる試験については、今後調査予定である。

### 3 検疫条件に対応した防除技術の確立

令和2～4年度の調査結果では、根洗い後の品質低下抑制技術については、慣行に比べ品質低下を約70%低減することができた。また、センチュウ除去技術については、センチュウ除去の失敗率を慣行の約70%低減することができた。今後、確立された技術を分かりやすくまとめて生産者に配布し、勉強会や個別巡回を通して、防除技術を普及することにより、輸出拡大が期待される。

## ●今後の普及活動の課題

### 1 巡回指導・勉強会等を通じた栽培技術の継承

今後も、産地や関係機関と連携しながら、定期的に勉強会を開催していく。加えて、若手生産者が勉強会の受講といった受け身の姿勢だけではなく、自ら熟練生産者のもとに技術を教わりに行くなど能動的に動けるように巡回指導を通じて働きかけていくとともに交流の機会を設ける。

### 2 生産量増加に向けた栽培技術支援

黒松の挿し木技術確立のため、挿し穂の充実度や挿し木用土の種類、発根促進剤の浸漬時間など、検討事項が多数あり、挿し木に最適な条件を見つけるため、継続した調査を実施する。

また、新たな課題として、効率的・集約的な苗木生産に向けた育苗技術の検討を行う。接ぎ木による苗木生産のために必要な台木は、実生から生産されており、露地播きとポット播きが行われている。露地播きの方が生育旺盛であるが、畝立てや土壌消毒、掘り上げ等の作業に多くの労力がかかることから、実生苗の省力的な育苗技術について検討していく。